

## ラーデン・アジェン・カルティニの

### 思想における国土と民族

——インドネシア民族運動史の序章——

#### 別 技 篤 彦

#### は し が き

ラーデン・アジェン・カルティニはインドネシア民族の歴史に輝く美しい一つの明星にもたとえることができる。うら若い女性として近代インドネシア民族覚醒の契機を作ったとともに民族の心の近代化の指導者としてこの国の史上に忘れられるのできない人物である。最近のインドネシアナショナリズムの歴史を扱った論者の第一頁にまずカルティニの名があげられるのはこのためである。たとえば、カヒンは次のようにのべて居る。

「一九一二年前のインドネシアナショナリズム運動の重点はむしろ教育にあった。この点で最も貴重な最初の努力をなしたのはカルティニである」<sup>(1)</sup>

ここでわれわれは簡単に彼女の経歴をのべておこう。カルティニはラーデン・アジェンの称号が示すごとく一八七九年、中

部ジャワ、ジャバラの県知事の娘として貴族の家柄に生れた。幼時から聡明な娘であったが、父の計らいで六才でオランダ人小学校に入学しオランダ人と同じ教育を受けた。これは当時としては全く破格の事実であり、ジャワ社会を支配する慣習に反するところのようたる貴族社会の非難をうけた程である。このため小学校卒業後はその切な望みにも拘らず上級学校への進学は不可能であった。しかし教育によってひとたび知識の門戸を開かれた彼女はオランダ語を通じて西欧の文化を吸収し、読書と多数の友人との文通によって急速にその知識を深めた。一八九九年（二十才の時）からことにその手紙による活動がさかんとなる。そのころ蘭印文教局長官であったオランダ人アベンダーノンと知りあったことは彼女の活動に大きな力を与えることになった。一九〇三年、レンバンの県知事と結婚し、翌年一子をもうけたが産後の肥立がわるく、二十五才であえなく世を去ったのである。歿後、その書簡や遺稿が名高い「光は暗黒をこ



R. A. Kartini (1879-1904)

りあう為であった。この日は私の生涯において特筆されるべき日となるであろう。……私がバタビヤに帰ったのも、カルティニはどんな手紙をよこすようになったか、その手紙は一通に上によまず異常な思考と感情の躍動をもってわれわれに送ってくるものがあった。それはジャバ民族の幸福のために努力しようとする強力な意志をもって具われていた。カルティニの手紙はたえず私達に奮闘の勇気を与え、彼女の意志に答える大きな道義的責任を感じさせられた。<sup>(3)</sup>

さて、この書によって公開された<sup>(2)</sup>彼女の思想はインドネシアのインテリに絶大な刺激を与え、そのナショナリズムに点火することとなり、その運動は自ら教育による人間解放を目的としたものが、次第に発展して政治的色彩をおびるに至った。今日彼女が「インドネシア建国の母」として崇められているのはこうした理由からである。アベンダーノンはその回想記において次のように述べている。

一九〇〇年八月八日、私は文藝局長官として妻とともにジャバに赴いた。その目的はジャバの県知事とその娘であるカルティニに会い、原住民の娘たちの教育という問題について語

らうであった。この日は私の生涯において特筆されるべき日となるであろう。……私がバタビヤに帰ったのも、カルティニはどんな手紙をよこすようになったか、その手紙は一通に上によまず異常な思考と感情の躍動をもってわれわれに送ってくるものがあった。それはジャバ民族の幸福のために努力しようとする強力な意志をもって具われていた。カルティニの手紙はたえず私達に奮闘の勇気を与え、彼女の意志に答える大きな道義的責任を感じさせられた。<sup>(3)</sup>

「私は暗黒をこえて」は教育によって暗黒から開眼させられ、その精神を開拓されたインドネシア人の心の発展の可能性を世界に示したものであり、インドネシア史上においても貴重な文化遺産である。もちろん彼女が全休からみればジャバの特権的封建貴族の一人としてヨーロッパのブルジョア文化により教育された典型的な一人であるかも知れないが、当時全国民の殆んど見てが文盲であった事を考えれば、彼女の思想には時に少女的感傷がみとめられるにしても始めて近代的教育の基礎の上にものを書いた最初のインドネシア人であったことは特筆するべきことである。これによって彼女の思想のあとをひり下げてみると、われわれはその根底に流れる精神に今も驚嘆せざるをえない。すなわちそこにはインドネシアの国土、民族、その文化に対する比類なく深い認識と愛情が存在するからである。カルティニが激しい感情をもってジャバ封建社会の革新と民族の向上とを訴え続けたのは根底

にこの深い認識があつてのことであつた。彼女はジャワの婦人の解放運動の先駆と考えられており、これまで彼女の事蹟にふ

のです」(一九〇二、四、二七の手紙)<sup>(7)</sup>。

れた記述はほとんど此の点にのみ集中されてきた。たとえば、『蘭印百科辞典』の彼女の項目をみると、「……カルティニの書簡は原住民の娘たちの発展のために重要な意義をもったとともに、その思想はインドネシア社会に存在する多妻制度を廃止させようとした男性たちにも大きな刺激を与えた云々」とあり、

彼女によって種子をまかれたインドネシアナショナリズムが独立によって一つの結実をみた今日、われわれは改めてカルティニの思想を検討する必要があると思う。その前にわれわれは一応カルティニの思想を生んだ一九世紀後半のジャワ社会の状態を検討する必要がある。

注(1) G. M. Kahin; Nationalism and Revolution in Indonesia, 1952, p. 64.

(2) Door duisternis tot licht, gedachten over en voor het Javansche volk van wijlen Raden Adjang Kartini, 1923. これは一八九九年五月二十五日から一九〇四年九月七日までに書かれた百六通の手紙と若干の手記とをまとめたものである。

(3) idit. P. R. J. H. Abendanon; De aanleiding tot het openbaarmaken van Raden Adjang Kartini's denkbeelden.

(4) 早大社会科学研究所 インドネシアにおける日本軍政の研究、昭三四・八九頁

(5) 早坂四郎 ジャワにおける婦人運動史の一駒、芸苑、昭三二・七月号

(6) Encyclopaedie van Nederlandsch Oost-Indie. Deel 2, p. 279.

(7) Door duisternis; ibid. p. 208.

彼女はおのが民族の過去、現在を憂い、将来の発展を熱望したもものになかった。「わが民族を向上させるために高い精神的立場を与え、よりよい幸福な社会にまで到達させることは私にとっての最大の理想であり、全生涯をかけての仕事に値する

## 「一」 一九世紀後半におけるジャワの 社会的環境

インドネシアナショナリズムの成長を条件づけたジャワの環境は同じ東南アジアでもインド、インドシナ、ビルマ、フィリピンなどに比べて著しく特色があり、その発展とそれに続く革命運動を理解するためには、それが発達した社会環境を十分に理解する必要がある。現在のインドネシアナショナリズムの太い根は正として二十世紀の土壌によって養われたけれども、そのうち重要な根の何本かはもつと古い歴史の地層の中にのびている。カヒンなどはこれをオランダ東インド会社がジャワに建設された一七世紀にまで溯らしめているが、ここではカルティニの生れた十九世紀後半だけに焦点をあててみたい。

十九世紀のジャワはその前半からここに施行されていまいわゆる強制栽培法によって社会全体が極度の暗黒に陥った時代である。オランダはこの制度によってわずか四十年たらずの間に東インド会社の負債三、五五〇万ギルダーを返済した上、更に国庫に六億六千万ギルダー以上の巨大な利潤を獲得し、一方ジャワ農村は極度の搾取によって餓死寸前の状態に追いやられた。この状況は名高いマックス・ハーフェリアルによく描かれている。

もし人がオランダ本国で売られているジャワ物産の驚くべき分量を見たなら、いかにオランダの植民政策が効率的であったかを十分認識できるであらう。しかしどうしてもこれは立派

な政策とは言えぬ。なぜなら、ジャワの農民自身がその結果に相当するだけの報酬を受けとっているかと聞かれた時、私は否定的な答えをしなければならぬからである。オランダ政府はその欲するものをジャワ人の土地に栽培するようジャワ人を拘束し、而もかれらがその生産物をオランダ政府以外のものに売れば、これを厳罰に処し、またジャワ農民に支払うべき価格は政府が任意にこれをきめる。高い利潤を生み出すためにはジャワ人が餓死しなければよい程度にものを支払うより外にない。餓死されればもともともなくなるからだ……パタビヤ、スラバヤその他の港ではオランダの富の源となる物産を満載した船が押しそうにオランダ国旗をひるがえしているが、その裏では十二分な豊饒さをもっている筈のジャワが、たえず飢饉におそわれている事実を忘れてはならない」とし、農民がいのちを頼む最後の水牛さえ日中恥すかしげもなくオランダ政府の保護の下に奪っていく原住民官吏の姿をあげ、素朴な男女の愛情までもオランダ兵の銃火にふみにじられる悲劇を描き、かくてオランダをさして「オストフリースランドとシムル用との間、海に沿う強盗国」とよび、オランダ王ウィレム三世に向って「エミラルドの首飾りとして赤道をとりまく美しい東インド植民地の国王たるあなたにあえておたすねするが、この遠い国士で三千万人以上のあなたの国民があなたの名において虐待され、搾取されているのは、いったいあなたの意欲であらうかい」と、ふまからオランダ人である著者のデッケルをして訴えさせたほどの惨状であった。このマックス・ハーフェリアルがいかにオラン

ダ本国の人々のヒューマニズムをゆり動かしたか、そして結局は強制栽培法の廃止へと導いたかは周知の事実である。

カルティニもマックス・ハーフェリアルを読んで大きな影響を受けたことは明らかであった。一八九九年十一月六日の手紙にも、「私はマックス・ハーフェリアルをもっておりまして、ここに描かれた土地へは行ったことはありませんが」と述べている。又、一九〇〇年、月十二日の手紙にも、「あなたはジャワの住民の状態がまだマックス・ハーフェリアルに描かれているような悲惨なものかとおなやめになりましたが、私はいいえとお答えできることを神に感謝しております。私の知っている限り、サイジヤとプディンダの歴史はもう過去のものに属しているようです」と述べている。

マックス・ハーフェリアルはオランダおよびそれと結託したジャワ人上層階級の搾取ぶりを徹底的に曝露したが、そうした経済的搾取こそ、八六〇年の政治転換以後姿を消したものの、なお原住民社会の生活の困窮は著しいものがあつた。長年に亘る搾取は農民としての活力と創造的な能力を奪い去り、この社会的心理的な要素はたとえ制度が廃止されても直ちに消失せず、その後更に長期に亘って農民生活の発展を阻止したのである。ことに一八七〇年以後、私人の企業と原住民農業の保護を目的とする新しい農業法が発布されたが、内容的には、私人企業によるプランテーションの拡大の方に著しい傾斜が示されている。

これによって新しい作物が新しい分布地域を拡大してジ

ャワに大きな一つの富を加えることになりけたが、それらはすべて強制栽培時代の政府に代って新たに勃興したオランダ資本家をうるほしたにすぎない。原住民農業の保護政策としては灌漑事業の拡大に重点がおかれたが、いわゆる「灌漑局」が設立されたのは一八八五年である。従ってカルティニの時代にはすでに経済生活改良の新しい方策はみえてはいたが、その実際の効果はまだ極めてわずかであったといえる。たとえジャワの土地所有関係をみて、一八八二年にはなお四七％が個人所有、四二％が村落共同体の所有、十一％が村役人（貴族階級の一つ）の所有地であつて、まだ市場経済から切りはなされ階層分化の進まない封建的状况がよくわかる（一九三二年には個人所有地は八二％となるに至るのである）。ファン・デル・ホルフが論ずるように、「原住民民に対する社会倫理的責任感と道義的義務から得られた体系的な福祉政策が効率的にあらわれ始めたのはようやく二十世紀に入ってからなのであつた。技術的未発展のまゝにすておかれた原住民農民は自然に対抗するすべを知らない、後述することく各地に頻発する洪水、旱魃、飢饉はつねにカルティニの心を悩ましたものであつた」。

「ジャワのような肥沃な土地に飢饉など起るのは全く信じがたいことと思われまふ。住民は毎年心配しながら西のモンスーンを待っているのです。それがこないと旱魃の危険があると共に、必らず低地では洪水をひき起すからです。政府は一体水利工事にどれだけの金を使っているのでしょうか」(一九〇一・八・一〇)。

その上社会全体からみればジャワ人の指導者ともいうべき上層階級はまだ全く大衆とは遊離した存在であった。

「ジャワニ七〇〇万の人間を急速に最高の段階まで向上させることは絶対に不可能なのだろうか。この民族は本来内的にその貴族たちと密着している。まずここから入っていけばたやすい入口がみつかるかも知れない。しかしこれまでジャワ貴族はその権力を誤って用いてきた。大衆についての考慮にほとんど払われなかった。これは急いで変化させねばならぬ。貴族は民衆の敬愛の対象となるようにつとめ、かれらの価値とならねばならぬ。」(一九〇三・三・一の手記より)。

みずから貴族の一員であるカルティニはその内情をよく知るがゆえにかく嘆いていたのである。民族向上へのジャワ貴族の無関心は何より教育の無視となつてあらわれていた。カルティニ自身そのため苦い体験をもつていたが、一九〇二年、すなわちカルティニの在世当時、ジャワの県事中、オランダ語が読み書き出来るものはわずか四人だけである(カルティニの父もその一人であった)。一九〇〇年—一九〇四年の平均をみると、中等教育をうけたインドネシア人が(その全部が貴族階級であるが)、わずか二十五人という数字はある意味で驚くべきものがあつた。カルティニがジャワの悲惨な状態の改善にまづ教育の普及をとりあげたのは当然であつた。

注(1) G. M. Kahin; *ibid.* p. 1.

(2) G. M. Kahin; *ibid.* p. 11.

(3) Mulatuti; Max Havelaar, of de Koffi-veilinger.

## (二) カルティニの思想に流れるもの

カルティニは西欧文化の心酔者であつたという論者もあるが、これは彼女の思想や行動の極めて表面的なのみしかみていない見解である。もちろんカルティニは始めヨーロッパ留学を夢み、西欧文化に対しては時に熱情的にすぎるほどのあこがれを示した。

「ヨーロッパに行くこと……それは私の全生涯の最後まで大きな理想となつてゐることでしょう。」(一九〇〇・一・一二)。  
あるいは、「ヨーロッパ……ヨーロッパ！ それは私にとつて永久に到着しないものとして残るのでしょうか。こんなに心からうたがへてゐる私なのに。」(一九〇二・一・一二)。

しかも当時の一般情勢として彼女が民族覚醒の武器としてまず先進諸国のものものを吸収するのを最も有力な方法と考へたのは当然であつた。これについてはカルティニ自身、次の通りに記してゐる。

「ああ、私たちの民族！ その根本においてかくも美しく、みずみずかき詩情、かく雄大な民族！ 人々はいかに私たちの心がジャワ的であるよりすうとヨーロッパ的であるなどと思ひます。それは悲しい考へです。勿論私たちはヨーロッパの思想や感情の影響を受けましたが、私たちの血管の中に生きてゐたかゝく流れてゐるジャワ人としての血は決して影響されてはいません。」

「私の目的は半分のヨーロッパ人、すなわちヨーロッパ化さ

der Nederlandsche Handelsmaatschappij. (一九五四年版)

(4) *ibid.* p. 52-53.

(5) *ibid.* 第十七章がこの物語。

(6) *ibid.* p. 238.

(7) *ibid.* p. 239.

(8) Door Eulstermis; *ibid.* p. 21.

(9) ヴィンセス・ハーネキナルの中で最も劇的な物語で、西ジャワの貧しい農民サイジャとその恋人アディンダの悲恋を描いたもの。

(10) Door Eulstermis; *ibid.* p. 30.

(11) 拙著、東南アジア諸島の居住と開発史、昭和三五、七九頁。

(12) Kahin; *ibid.* p. 17.

(13) Van 'er Kof; European influence on native agriculture. "The effects of Western Influence on native civilization in the Malay Archipelago." 1929. p. 114.

(14) Door Eulstermis; *ibid.* p. 122.

(15) *ibid.* p. 390.

(16) Arrifin Pané; R. A. Kartini. 1938. p. 7.

(17) Kakin; *ibid.* p. 31.

れたジャワ人を作ることではありません。もちろん私は人々にヨーロッパ文化のよさを与えたいとは思いますが、その目的はこれによって民族個々の美しさを捨て去つたりするのではなく、本来のものを一層リファインさせるためのです。」(一九〇二・六・一〇)。

こうした点から考えると、たとえば蘭印百科辞典に「ヨーロッパ人学校へ通つたことによつてカルティニはオランダ的な眼をつくり得た」と記されてゐるときは全くの誤りといわねばならない。

彼女は種々な理由でヨーロッパへはついに行けなかつたが、それが彼女をして一層オランダ語による、オランダ人との文通に熱意を抱かせたともいえるのである。しかしカルティニはその中でのいかに屢々オランダに対して鋭い、辛らつた批判を加へてゐることか。

「私はオランダ人の友人をたくさん知つており、みな好きな人ばかりです。しかし『彼はヨーロッパ人だし、おまゝはジャワ人だ』、いいかゝると、『彼は支配者でおまゝは被支配者のだ』という態度でゐるオランダ人も亦多いことを知つていたのです。」(一九〇二・一・一二)。

この怒りはカルティニがオランダ語を話せるのを知りながら、故意にハーサル・マライ語で話しかけ、彼女の心を傷つける人々の存在を想起させるのである。

「なぜオランダ人は自分の言葉でわれわれに話しかけないのでしょうか。わかりました！、オランダ語は褐色の被支配者が

口にするには余りに美しい高級な言葉だと思っているからなのです」(一九〇〇・一・一一)。

「当地の多くのヨーロッパ人は重い心をもって彼等が劣等と考えていたジャワ人がいかに目ざめつつあるかを見ています。白人と同じよい頭脳とよい心をもった褐色の人々が抬頭してくるのをみています。……私はオランダ人を愛し、われわれが彼らから得たいいろいろなものに感謝しています。かれらの多くは私のよい友人ですががしかしなほわれわれを好まない多数の人々がおります。かれらはわれわれが教育と文化においてかれらと平等になるのをいやがっているのです。ああ、私は今なぜ彼らがジャワ人の発展に反対するかはつきりわかりました。ジャワ人が発展するとかれらは凡てのものに対してアーメンと云々なくなるからです」(一九〇〇・一・一二)。

「ジャワ民族の発展のためにオランダ政府は何をしたでしょう。なるほど学校は各地につくられましたが、それははっきり二種類に区分されています。オランダ人の為の学校には力を注いでいますが、もう一つのジャワ人の為の学校については殆んど放任されています。私はオランダ政府がもしジャワ人の教育に力を入れるとジャワがうまく治められなくなると信じているにちがいないと思うようになりました」(一九〇〇・一・一二)。

これらの手紙はすべてオランダ人にあてられたものであるのと思うとき、この痛烈な批判はいかにカルティニが所信に勇敢であり、自己に真実であつたかを証して余りあるものである。カルティニが書簡と手記のなかで取り上げた問題は国土と民

と新しく述べるまでもないほどである。私は従つて観点をかえ、今日までの論者がふれなかつた次の観点からカルティニの思想を再検討しようと思うのである。

#### (1) 国土と民族とその文化に対する愛と認識

インドネシアは美しい熱帯の自然に包まれた風土と民族、また永い歴史のうちに醸成された伝統的な文化をもつに拘らず、それに対する認識は民族の精神的風土がまだ未開発のゆゑにこれまでのインドネシア人には全く欠けていた。もちろん近代のインドネシア史をひもとけば文学におけるノト・スロト、絵画におけるラーデン・サレーのような芸術家は存在したもののそれは極めて例外的なもので、全体的、客観的な認識は何ら為されることがなかつたのである。カルティニは近代的教育によつてまずこの点にめざめた。国土の自然に、民族の特性に、また言語や芸術に対してカルティニは熱狂的な愛情を示したと同時にそこにひそむ欠点に対しても新たな認識が加えられた。われわれはここに始めてインドネシア人が自己の所有するものに對する偽らざる評価と感情をうかがい得るのである。

#### (2) インドネシア人の性格乃至は心理の解剖

一民族の性格や心理的特質は外部のものには容易に知りえない事実である。たとえかなりの時間をかけてかれらの中に潜り込んで生活しても、その観察にはなお多くの脱節があるであらう。カルティニはおのが民族を愛するがゆゑにその性格については善悪いづれの方面についてもこれを明確に理解していた。タンチャラニングラット、ゲールツ、パルミナなどによる最近

族、東洋と西洋、男性と女性、政治、経済、社会、文化、科学などのあらゆる部門に亘っている。小学校だけで終つた彼女がいかに独力で自己の完成と充実につとめたかが、うかがい知れる。

「子供のときから私は学ぶことが大好きで、できるだけたくさん学び、知ることが私の最大の、かつ最愛の夢でした。……オランダ語を学ぶことも私にとって欠かせない喜びの泉でした」(一九〇二・四・二七)。

当時として読みうる殆んど凡ての文献をカルティニが読破していることは彼女が生活している当時の東南アジアの「未開」の植民地という地理的条件とその年令を考えたときむしろ一つの驚きでさえある。ブランドス、ケルソ、ルーフェールなどの歴史、民俗学者の著者から、マックス・ミューラー(これは屢々引用されている)のもの、女流作家アウグスタ・デウィットなどのものに至るまで広汎な本の標題を彼女の手紙から拾い出すことができる。その他オランダ人が現地の社会的事情について書いた著書や論説は枚挙にいとまない。ドロシー・ウッドマンが批評しているように彼女は一人の天才であつたけれども、同時に絶えざる努力家でもあつたのである。

凡そ一國、一民族にとって必要なのは單なる觀念論や狂熱的抽象論によらず、具体的内容をもつて、心からその国土と民族を愛する指導者の存在である。彼女が特に強調し、ある程度の成果をおさめたジャワ婦人解放の必要さと教育の建設についてはさきにも述べたこととくすでに余りにも有名であり、ここにこ

の文化人類学的業績がジャワ社会に加えられる半世紀以前にすでにこれらに関する貴重なデータがカルティニの手紙の中にあふれているのである。

#### 註(1) Door duisternis, ibid. p. 27.

- (2) ibid. p. 40.
- (3) ibid. p. 116.
- (4) ibid. p. 223.
- (5) Encyclopaedie van Nederlandsch Oost-Indie. Deel 2. p. 279.
- (6) Door duisternis; ibid. p. 40.
- (7) ジャワの下層階級のものが市場などで物を買う時利用する最も卑俗な言語。
- (8) Door duisternis; ibid. p. 40.
- (9) ibid. p. 12.
- (10) ibid. p. 34.
- (11) ibid. p. 208.
- (12) D. Woodman; The republic of Indonesia. 1955. p. 150.
- (13) これらの論著のうち主要なものをあげると次のとおりである。

Koenjaraningrat; A preliminary description of Javanese Kinship system. 1937.  
Koenjaraningrat; Some social anthropological observations on Gotong Rojong Practices in

two villages of central Java. 1961.

Geertz, C.: The religion of Java. 1960.

Geertz, H.: The Javanese family. 1961.

Palmier, L.: Social status and power in Java. 1960.

### 〔三〕 国土への愛

さて、このようなカルティニの思想の中でわれわれはまずジャワの国土、その自然をカルティニがいかにか感じとっていたかを見よう。これはインドネシア人の自然観の歴史的展開を知る上でも貴重なデータである。特にわれわれを驚かすのは郷土の海に対するその熱情的な愛着である。ジャワの海岸で育ったカルティニは海の意識を忘れず、その手紙はある意味で潮の香に満ちているともいえる。

「私は時々大好きなジャワの海岸に立ちます（彼女はこのを『小さいバニヤン』とよんでいた）。海は神々しいまでに美しくないので、沈んでゆく陽を受けて色彩の魔術でも使っているようです。それはこの世ならぬ真珠貝の色に似ています。西の方ではまた天はざらめく陽の炎のなかにありますが、海と空とが接触する南の方ではもう暗い紫色がただよい始めています。……この美しい空の下にまっしろな海岸が波をひんひたさせながら横たわっています。私は夢のような幸福を味うのでした。」（一九〇二・八・二〇）<sup>(6)</sup>

「ああ、私が森の中で鳥のなき声をきく時、心は喜びで若返

うちの娘ほど船にのるのが好きな子はみた事がない。」（一八九九、十一）<sup>(6)</sup>

やがて結婚すべき夫のいるレンバンに始めて赴いた時にもそこで海を見出したがゆえにカルティニの心は慰められたのである。

「レンバンは静かな土地でした。私は少しも實質的な土地と云う感じをうけませんでした。しかし私はそこで一人の偉大な友人をみつけたのです。それは海でした。家から百歩さういでもう海岸です。私はこの土地が好きになれそうでした。」（一九〇二・八・二五）

しかし彼女にとってはこの美しい海と島の国は直ちに我が祖国という意識を結合しているのである。

「私はまた夢のように蒼く、月光に照らされた美しい愛すべき海岸を見ます。月光はたえず動いて波に反射しています。無数の生命を思ひ、金銀の光。そして私は椰子の葉、銀の羽毛のように賑やかな夜風にそよそ音を聞きます。その風は静かに私の頬をなで、耳に鳴ります。この夜の海岸でのたのしい興奮、美しい夢、銀の光のなかに溶け込んでいる海。この美しい海は私にこれこそ神聖な我が祖国だという言葉をささやいてくれるのでした。」（一九〇二・八・八）

彼女はさらに書いている。

「花と香とは私たちジャワ人にとって失うことのできないものです。その香りをかぐとき、東インドの花とドゥバの香りは何という思考と感覚の世界なのでしょう。それは私の血管の中

ります。自由な自然の中にある時、私は神に出会い、神を感じ、と心ごとができるように思えます。すべて美と詩、平和といふの中にいきづいているジャワの海岸に立つといつも私は幸福だなあと思うのです。この国土でこの美しい人生——そこには明暗の影の両面があるに拘らざ——を存えて下さった神に感謝します。人生はこうして私たちの幸福のために与えられたのであって重荷としてではない筈です。」（一九〇〇・八・二二）

「時として私は鳥のなき声をききとれて悲しみを忘れます。」

しかし私はまたよく海岸に出て休みます。平和と詩、夕陽が沈むとき波が示してくれる光の演劇の不可思議さ！ ああ、美しいこの国土。私はこの美しさを見るのができるのをいつも神に感謝しています。」（一九〇一・六・一）

四面環海のジャワに住み、モジョバイト王国時代には海外に

雄飛して海と島の意識に旺盛であつたジャワ人もオランダによる支配後はその意識を復活させる機会には全くめまされていなかったのである。モジョバイトの獨詩ナガラクルタガマに現れたごとく海島意識はその後五〇〇年の長きに亘ってジャワ人には殆んど異質的なものと見えなうてしまつていた。

「あなたは私が小舟をこぐときにどんなに眼福するか知っていらっしゃるでしょうか。私の心は海と見えれば燃え上るのです。以前私が中国人の重片船にのつて半死半生の目にあつた時でさえ、実は波にゆられる気持を愛したものです。子供の時から私は神聖な海をたなえました。私がいも男の子だったらさうと船乗りになつていたでしょう。私の父もよく人にいいます。」

にジャワ人の血をいっそう深く感じさせます。私たちは花のにはい、香のかおり、ガメランの音、風にそよぐ椰子の木の葉の音、鳩のなきごえ、稲の葉がかすかに風に鳴る音にさえジャワの血を感じるのです。」（一九〇二・八・二）

この文に引きつづいて彼女はこう云っている。

「内容のない形式は一体意味があるだろうか。形式はいくらでもつくることができよう。しかし内容こそ本質的なものである。国土もおなじことだ。ジャワにはかくもすばらしい本質的なものが満ちあふれているのである。」と。

従つてジャワの国土を構成するすべての自然はその本質的内容としてとらえられているのである。カルティニは国土の美しさから祖国の意識を強く感じとつた。彼女が「学科の中では地理が大好きだった」（一九〇二・六・一〇）

といっているのもこれを結びつけて理解できる。彼女によると「子供の時から蘭印言語・地理・民族学雑誌（『Tijdschrift voor taal-land-en volken kunde van Nederlandsch-Indië』）を読んでいた」（一九〇二・一二・一二）とある。これは一七八年ヨースバ人が海外植民地で設立した最初の学術研究団体といわれるバタヴィヤ学術協会（Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen）の機関誌で一八五三年から刊行されていた。その後のマライ諸島地域の科学的研究の巨大な支柱となつたもので、ことに地理学的研究について豊かな資料にみちている高度の学術雑誌であるが、これを子供の時から読んでいたということは驚ろくべき事実である。さらにカル

テニーは一九〇二年八月、コル夫人あての手紙の中でも「ジャワの国土と住民」(Land en Volk van Java)の序章を読んで私はどんなに満足したことでしょう。私たちの国土の美しさをよく描き出したこの本で私の心はあためられ、かつ驚ろきました」と記している。ここに記されている本の著者が誰であるかは手紙には書かれていないので知ることができないが、標題から見て明らかに地理書であることは疑いない。カルティニがわが住む国土を記述する地理書に大きな関心と興味をもっていたことはこれらの点からも明瞭となる。ジャワの本格的な地理書としてまとめられた最初のものはビートル・ヨハンネ・フットの「ジャワの地理・民俗および歴史」(Java, geografisch, ethnographische historisch)であって、一九〇三年に刊行されているから、カルティニは生前まだそれを読んではなかったことになる。しかしそれ以前にすでに彼女がこうした種々な地理学的論文や著書を愛読したことは注目すべき事実であり、これは彼女が感情的に国土の重要性を強く感じたとはいえなさそうである。従って彼女の最終の目的は次のようなものになるわけである。

「私の目的は国土と国民に対する愛と熱情とを抱く真のジャワ人をつくることにあります。また国土の美しさに對する広い視野を開放された心とを得させる事にあるのです。」(一九〇二・六・一〇)。

しかしジャワの現実の国土は単にその自然美だけが特色であるのではなく、強烈な自然力による災害の著しい国として

も知られている。カルティニの国土観はこの方面も忘れなかった。ジャワに自然の災害が加えられたとき、カルティニの悲しみは大きかった。

「もう二週間一滴の雨もふりません。呼吸もできない位の暑さ。雨季に入っているのに一体どうしたのでしょうか。乾季の時ですえ、かつて経験しなかった暑さです。父は絶望的になっています。稲は褐色になってしまいました。おお、あわれな同胞たちよ、かれらはただ力なく立っているばかりです。」(一九〇三・一・十七)。

「かわいそうな国土！ 旱魃によって全地域に干り、多くの水田がだめになりました。グロボガンでは餓饉が起り、デマクでは二万六千バウの水田がだめになった上、コレラにおびやかされています。東モンスーンの時には水不足に悩み、西モンスーンの時は洪水に悩むこのかわいそうな国土！」(一九〇二・九・一・十、一一)。

五月十八日の日蝕には世界各国から学者が東インドに観測のためやってきましたが、その日は不幸にも空が曇り、その上雨さえふつたので私はとうとう観測できませんでした。しかし私にとっては残念でしたが、同胞にとっては何れも喜びの雨となったのです。乾き切っていた水田はこれでよみがえったからです。」(一九〇二・六・一〇)。

ジャワにおける二つのモンスーンの存在はカルティニに於てはつねに洪水と旱魃、つまり民族の運命と結びつくものとして意識されていた。彼女の書簡の中にこの「モンスーン」という

(21) *ibid.* p. 120.

(13) *ibid.* p. 145.

(14) *ibid.* p. 114.

(15) *ibid.* p. 122.

#### 〔四〕 民族と文化への愛

言葉がたえず現われているのはこのためである。その他火山の爆発、暴風雨などの自然に對し、つねに民族の運命を思いやった心はカルティニが女性だったためのみならず、一民族の指導者として本質的な心であることはいうまでもない。しかしこうした自然の災害を考え、「かわいそうな国土よ……」と嘆きながら、なほかつ彼女は本質的にジャワの国土のもつべきに引きつけられざるをえなかった。

「しかしいかにジャワが悲惨であってもこの人達は冬の寒さに悩む、自然にめまされぬヨロバの人々より、もろく不幸福なのだといわなければなりません。」(一九〇二・八・二〇)。

カルティニにあつてはヨロバは自然の恩恵のない国土としてジャワと対比されているのであった。

(1) スケベニンゲン(Scheveningen)はオランダ西部の避暑地として有名な海水浴場。

(2) *Door duisternis: ibid.* p. 124.

(3) *ibid.* p. 49.

(4) *ibid.* p. 113.

(5) 拙著、前掲二七頁。

(6) *Door duisternis: ibid.* p. 24.

(7) *ibid.* p. 363.

(8) *ibid.* p. 118.

(9) *ibid.* p. 116.

(10) 拙著、前掲二七頁。

(11) *Door duisternis: ibid.* p. 223.

同時にかかる国土愛はそれに抱かれて住む民族への限りない愛着でもある。カルティニはつねに、ジャワ人は大きな子供である<sup>(1)</sup>と考えていた。しかしその民族心理を分析すれば多くのよい、美しい資質が潜在しているとす。従つてその資質の伸長は全く指導如何によるのである。そしてカルティニが自己の民族を第三者に對して述べる場合、何ら卑下や劣等感などが現われていないことに注目すべきであらう。オランダ人に對して堂々と自己の民族を誇らかにたたえているのである。

「あなたが私たちの民族の魂にふれたなら必ずこれにひきつけられる事は疑いありません。私たちは実に自然に近いのです。単純で理解しやすい民族なのです。」(一九〇二・八・二五)。

「私たちはまだ世界に余り知られず、また誤って考えられている私たちの民族をむしろ誇りとします。」(一九〇二・六・十、十一)。

そしてカルティニの民族愛はまずジャワの心の中にある詩に注目した。

「人間の生涯の中で最も美しいのは詩です。愛、献身、真実、宗教、芸術、凡て人間を輝かせ、発展させ、美化させるものは詩です。ジャワ民族と詩とは内的に深く織り合っています。」

どんなにつまらないジャワ人でも詩的であるのです」(一九〇二・八・一五)。

かくわれわれかたはジャワに古くから伝わるさまざまな歴史的特徴、動物が活躍し恰もイソップでも思われるドンゲン(高麗)、外国人としてはラッフルズがそのジャワ史を始めて注目した多くの民間などをみておき共に一貫しているものは強い詩情と夢なのである。しかもその久しい歴史を通じてこのようジャワ民族の特質の認識はカルティニを以て嚆矢とした。

「ジャワは童話と追憶の民族です。こゝした民族を実際の生活の中に導いていくにはどうしたらよいでしょう。……私たちの民族の中にはかくも多くの愛すべきものがあり、その無邪気な心の中には、かくも多くの詩があるのです。そのために私は一層この目上と民族とを愛するにほぐれませんが」(一九〇二・二・一五)。

また彼女はくり返している。

「ジャワ人は追憶と童話に生ずる民族です。そして夢と童話の中ではいつも最も驚くべき事が起ります。私はジャワ人の心を通してなほ奇蹟が起りうることを確信しています」(一九〇二・五・二六)。

ここにカルティニの大きな希望があった。民族の心が幼ないほど発展の可能性は無限ともいえるからである。

「人々がジャワについてたずねるとき、私はいつも次のように答えます。かれらは自然の子、太陽の子、しかし余りに国土が明るいので光りに眩惑してしまい、まだ自分たちの進むべき

路が判らないのです。あなた方もかれらの望みをかなえてやうて下さい。その渴望しているものを与えてやって下さい。しかし同時に何かしらしたものを与えて下さらなければなりません」(一九〇二・八・二)。

彼女はこの手記の中でも同じことを書いている。

「ジャワ人は他の自然児諸民族と同じく、光、香り、明るさに對して極度に敏感なのである。われわれはそれに對して満足を与えてやらねばならないか、それはしかりしるもの、あとまで残るものでなければならぬ」(8)。

ここにまたカルティニの真面目があった。彼女の民族愛は単なる盲目的な愛ではなかつたのである。カルティニはまた民間信仰に生ずるジャワ人の心、十分に理解できた。吾々の故にこそ一層の愛情を感じたといえる。

「村に火事があって十一軒の家が焼きました」ところから一軒の家だけは残木が焼けたがけですんだので人々はその家の主人に彼がジマート(お守り)をもつていたかどうかとたずねました。その男はもちろんジマートに守られたからだと言答をました。私は自分にやられます。こうして無邪気な心をうへ信仰……こうした美しい心を一体私たちの民族からどうして取り去ることがでさるだろうか」(一九〇二・十一・十二)。

「早魃がつづくので今朝からアロン・アロン(町の広場)に多数の老若男女、それに牛馬、羊まで加わって雨乞い祭が始りました。これをスンバヤン・イスティラというのです。三日三晩続きます。私たち民族の心をうたれる無邪気な信仰なのです。

しかも人々は私がその席に出て祈ると一層勉強あらたかたに信じています。それは私が皇知事の娘だからなのです。そうが、私たちの民族のためならどんな事でもやりましょう。なぜなら私は彼らの一人なのですから」(一九〇二・二・二)。

ジャワは俗信の国土である。精霊崇拜、妖怪への恐れ、山、祭儀など個人、社会をとらず、すべての生活が俗信と呪(結び)ついている。これは二十世紀になつてから、フアン・ヒーンから最近のゲールツの研究に至るまでヨーロッパ学者にとつても大きな研究対象となつてきたが、かれらは決して「未開民族のアニミズム」として興味本位的に考察するべきものではなかつた。それは民衆の生活の本質に外ならぬのであり、これを民族個々の美しい伝統とみるカルティニはむしろその中へ没入していくのである。「凡てはわが民族の為に」(Alles voor ons volk)が彼女の信念なのである。

カルティニの愛情はさらに強く民族の文化の上に及んでいく。彼女が認識した最も大きなインドネシアの民族性の一つはききにのべたごとく、かれらが先天的に芸術的素質をもち、詩的要素に満たされている事であった。そして彼女が具体的にとらえた一つは自己の国語の美しさであつたのである。「民族が自己の言語に誇りと自信をもつとき、それによって発展の第一段階に立っているとも考えられる」。

「私たちの民族の口から出る美しい言葉、知恵と真実のあらわれ。かくも明瞭で簡単ながら、またかくもリズムカルなことは……私たちがこんなにも自然と密着しているのです。そのひ

びきとりズムの美しさ。もしあなたが村に入り、その人々の言葉をきくなら無知な民衆がらゐかに音楽的な言葉が口から溢せられるかにおどろかれるにちがひありません」(一九〇二・八・一五)。

「私は特にあなたがジャワ語を学ばれるようにおすすめます。多分わずかしいでしょうがとても美しい言葉なのです。ジャワ語は詩とユーモアにみちております。ジャワの子であら私でさえしばしばびっくりするほどです。ジャワ人は詩を詩を作り、又詩鉄人をさすようなユーモアをいいます……これはひろくいてアジア人に固有な特色ではないでしょうか」(一九〇二・八・一七)。

「ジャワの見たの本は生のような言葉でかかれていますが書かれた歌であるとも云えましょう」(一九〇二・九・二)。

彼女のこうした考へはそれがヨーロッパの言葉を十分に修得した上でのものであるだけに一層傾聴に値する。それは決して盲目的な国粋主義の発露ではなかつたのである。オランダ語は好きだといひながらついにその中に美を見出しえないカルティニであつた。

さらにカルティニは民族文化の結晶として芸術には特別の関心をもつた。彼女がとりあげたのはまず手近な郷里ジャバラの伝統的な木彫であつた。

「ワヤン人形をつくる芸術はジャバラ特有のもののように、氣をつけてみると小さな子供でも砂の上、礫、柱など至るところにワヤンの像を描いています。これがやがていつは木彫の



「芸術を生活の中心とする」(一九〇二・三・五)。

「パタビヤの博覧会でジャバラの木彫が大へん注目されたという事をきいて私はうれしくなりました。ヨーロッパ人が私たちの民族の芸術を好むようになったのは喜ばしい傾向といわなければなりません」(一九〇二・六・一〇)。

「私はある日、木彫の美しいデザインをみて職人にあなたは一体どこからそれを知ったのかと尋ねました。すると彼は「お嬢様、それは自分の心の中からです」と答えました。私はそれをきいてすっかりうれしくなったのです」(一九〇二・八・二〇)。

このほかジャワ王宮の発展策についての記述は至るころにみられる。またカルティニはジャワ特有のガメラ音楽をこよなく愛し、そこに民族文化の高さと深さを見出してゐた。

「私の家のブンドボでやっているガメラは私についての一切をあなたに物語るでしょう。それは今私の大きな曲ギンジンをやっています。それは本当の歌ではなく、とても敏感な軟らかな、ひそかな風のような音です。それは楽器の木や銅やガラスから出てくる音ではなく、人間の魂の奥からでてくる音です。ある時は訴え、あるときは泣き、時としては快活に笑ひ、私の心はそのささやきと一語に動いていきます。純真な銀色のしらべは高く高く上っていきます。青い空、暗い谷、深い森を通して遠く輝く星にまで私をつれてゆきます。私の心はそれと共に、おそれ、悲しみ、苦しみにおののくのです。今まで何十回となく私はこのギンジン音をききましたが、いつもこれはど深

い感銘を与えるものではありません。序曲をきいただけで私はもううっとりとなつてしまふのです」(一九〇〇・一・二二)。

またカルティニはガメラ音楽を聞く自己のうちに民族のもつ芸術性の一つを見出してゐた。

「ガメラの調子はいつも私たちの血管の中へ火を流してこようです。おのづから指先が、手が、腕が、体がそれに合せて動き出さずにはいられません」(一九〇二・二・二二)。

「私は子供の時からガメラを聞く自分の気のつかないうちにいつか踊っているのが常でした。子供の時には踊り子になろうとささ考えた事があります。私は民族のもつ舞踊芸術をたえずにはいられます」(一九〇二・二・二二)。

彼女は一九〇二年三月二十一日、デ・ボイ・ボアス・ソノ夫人にあてた長文の手紙でジャワの結婚式の模様を詳細に記しているが、花と香、ガメラ音楽、舞踊、さまざまな祭儀につつまれた伝統文化が女性らしい繊細な観察をもつてよく表現されている。それは現代文化人類学者による分析をはるかに上廻る詳細なものである。しかもなほこれらの木彫、ガメラ、祭儀などは民族のもつ芸術の一部にすぎない。根本問題はかかる美しきものを生み出しうる民族性の愛護にある。

「私はわが民族の芸術を誇りとします。わが民族はこんなに美しいものを作ることができるのです。然し私たちはまだ子供なので誰か保護が必要だと思ひます」(一九〇二・六・二二)。  
さらにカルティニにあつては芸術の発展が即ち民族の発展につながるものとなる。

「私たちはわが民族の芸術を大いに復活させようと思ひます。それが民族の繁栄をもたらす手段となると考えます」(一九〇三・三・九)。

また次のようにも述べている。

「妹のルクミニはオランダに留学して美術学校へ入りたいという希望をもっています。それは将来ジャワの芸術を復活させるためなのです。民族繁栄の一つの手段です。私たち姉妹は協力してそのために尽そうと思ひます」(一九〇一・八)。

カルティニはすでに二十才のころからジャワ民族の神話、伝説、童謡その他文化の基礎的なものの蒐集に着手してゐた。もし天が彼女に齢をかしたならばこうした方面でも彼女は大きな業績を残したにちがいない。こうして彼女は次のような確信に到着するのである。

「ジャワ民衆の間には、多くの詩人と芸術家があります。……若いものの老いたるものに対する尊敬、生けるものが死者に対する敬虔の念、天国の祝福が与えられるようにとの祈り、すべてのジャワ人の生活の中には詩と芸術が混合しています。ジャワの芸術はこの点でも輝かしい未来を約束されているようです。それにつけてもこうした民族が低い段階にとどまっているというようなことが一体ありうることでしょうか」(一九〇二・八・一五)。

民族の地位を高め、これを導いていくためにはその特色をかくまで美しく把握するカルティニのような存在は絶対に必要であつたといえる。

このように民族への愛情が深いほどの反面において彼女がジャワを呪つた有名なバス・フェットの「蘭印における生活」を読んで怒つたのは当然といえる。

バス・フェットの経歴は明らかではないが、その著書は一九〇〇年、アムステルダムで刊行されてインドネシアへの悪意にみちた本としてたちまち大評判となつた。冒頭には次のように書かれてゐる。

「インドネシアは悪の化身である。私がそこで過した十二年は悪夢にみちた思いであつた。そこには善人は殆んどいない。徳というものは存在しない。それは雪より稀な存在である。……スマトラから始まってジャワ、セレベス、モルッカまで全地域はヨーロッパとは全く異つた墮落の世界である。そこに住んでいると誰もがいつかは脚氣にかかるように、心までおしぼられてくる。全くインドネシアは墮落病の病院であるといえる。野蠻、未開、この暑さと湿気、かび臭い無智の土人たち、ここは怪物の国である。ヨーロッパの刑務所にいるほうがこのインドネシアという売春宿に住むよりまだましだ……」

この社会生活はどうか？ だいたい生活なんていうものはこの国には絶対ありはしない。サル社会であり、人間にとつては不可能の社会が広がっているだけだ。……ここにいるヨーロッパ人は官吏、軍人、商人の三種類しかないが、誰もが早く昇進し、転任してヨーロッパへ帰ることはかり考へている。それは美しいもの、心をひきつけるものが何一つここにはないからだ！」

こうして全巻がヨーロッパ人の目でみた熱帯社会のあらゆる生活についてがい言葉で後悔にみちて記述されている。こうした著書の出現はブロムによると全く当時のオランダ人植民者の心理的反映とみられており、異質的な植民地でのかれらの寂寞と隔離の感情、ホームシックへの苦悶、「熱帯のノスタルジアへの苦悶」などがこうした「不平文学」の素地であるといえる。すなわちこれは当時のオランダ人側の一部に流れていた植民地への心理的嫌悪を示したもので、換言すれば心の面からも東と西とが完全に一致し融和しえない事実を指摘したものである。しかしカルティニはおのが祖国をかく記述されたことに屈辱と怒りを強く感じたのは当然であった。

「ジャワ人は多くのよいもの詩的なものをもっています。フットの本をよんで私は憤慨しかつ驚きました。世界のどここの国にでも欠点はあるものです。それなのにこんなインドネシアのことを悪く書いた本が普及すると誰も私たちの口に対して興味をもつものはなくなるでしょう。それに比べてアウグスタ・デ・ウィットはジャワを何と同情的にまた何と美しい言葉で描いていることでしょうか。」(一九〇二・五・二六)。

アウグスタ・デ・ウィットは当時のオランダ人の中でジャワの美しさにひきつけられた女流作家として名高く、「ジャワの幻想と現実」、「みまもる女神」、「村のサルフェウス」、「東インドの自然と人間」など多くの随筆や小説を残した。ブロムによると彼女は明らかな見解を以て内部からインドネシアの自然や社会生活を眺め、その偉大な想像力を働かせてこうした事実

を当時それに殆んど無智であったオランダ人に紹介したのであった。彼女の何よりの特色は「対象をヴィヴットな言葉の絵」を以て表現する異常な巧妙さにあった<sup>(30)</sup>のである。

次に引用するのは彼女が「ジャワの幻想と現実」のエピソードの中で述べた一節である。「一めんの甘蔗畑の中に聖樹ワリンギンが一本立っている。野良にゆく人々はその蔭で憩い、枝に小さな紙の扇をぶらさげ、根元には粗末な祭壇を作ってジャスミンの花や、黄ろいボレの塗り油や、うみ立て卵などをそなえていく。こうした本が残っていると、甘蔗畑の地味を消耗させることが甚しいので実は当然伐り倒さなければならぬのだが、本には地母神(ダニヤン・デサ)が住んでいるというので、そのままに残されているのである。現実の中にこうした詩と伝説が混っていることこそジャワの独特の魅力であり、きびしいヨーロッパ文明の現実の中に育った北方の人々をひきつける要素なのである。心の眼をみひらいてジャワをみる人々に、この子供のような人々の住む国が夢と幻想を残す国としてうつるゆえんである」<sup>(31)</sup>。これによってもアウグスタ・デ・ウィットが、カルティニにとってジャワの真の理解者としてうつり、その著書がいかに彼女を喜ばしたかの理由が明らかである。

カルティニはその国上と民族とをこのように認識した。しかしその発展を現実の問題と結びつけて考えるとき何より気がかりなのは人々の貧しさである。

「なぜジャワ人はこんなに貧しいのでしょうか。一日に二〇—二二セントぐらいしか稼げない草刈りでさえ税金を払わされるのとして映ったのであった。

註(1) Door duisternis: ibid. p. 252.

(2) ibid. p. 224.

(3) ibid. p. 254.

(4) Raffles, S: The history of Java, 1817. Vol. 1. p. 398 ff.

(5) Door duisternis: ibid. p. 202.

(6) ibid. p. 219.

(7) ibid. p. 359.

(8) ibid. p. 394.

(9) ibid. p. 310.

(10) ibid. p. 331.

(11) 拙稿「ジャバ人の精神世界 経済学雑誌二十五巻三号」。

(12) Van Hien: Javansche Gespenwereld, 1935.

(13) Door duisternis: ibid. p. 225.

(14) ibid. p. 258.

(15) ibid. p. 275.

(16) ibid. p. 130.

(17) ibid. p. 222.

のです。山羊、又は羊一匹を屠殺するたびにその人は二〇セントの税金を支払わなくてはなりません。ですから毎日二匹の山羊を屠殺するサッテ売り(焼肉売り)でさえ一年には一四四ギルダーという税金を払わされることになります。彼が生きてゆくため十分な稼ぎはいったいいくらになるのでしょうか。」(一九〇四・八・一〇)。

「ジャワ人の間では頭といわれる役人の待遇でもひどいものです。郡の書記は毎日働いてもせいぜい月に二五ギルダーくらいしかもらえません。それで家族を養い、ジャワ社会での身分を保つことができるでしょうか。そこでどうしても他の村人から物を受け取るようになるのです。この事はジャワの社会では賄賂というようなものではなく、彼の地位に対する尊敬の表現であり、同時に他の悪を予防することにもなるのです。ところが政府はこの慣習を禁じてしまいました。二級補助ウエダナの月給は八五ギルダーです。彼はその中から秘書をやとい、村々を巡視するための馬を養い、又家族を食べさせなければなりません。タバコ、アエルブランド(サイダーのこと)のみのものはみな自分でととのえなければならぬのです。……私は原住民官吏の懸念をよく知っています。さらに民族の憎み、苦しみもよく知っています。それなのに政府は何をしているのでしょうか。まず内務官吏(Binnenlandsch Bestuur)の改組が先決問題なのです。ヨーロッパ人官吏とジャワ人官吏との差が余りひどすぎるのです。」(一九〇〇・一・一二)。

これはもはや植民地統治の基礎構造にふれる問題である。人

- (18) *ibid.* p. 266.
- (19) *ibid.* p. 27.
- (20) *ibid.* p. 314.
- (21) *ibid.* p. 312.
- (22) *ibid.* p. 227.
- (23) *ibid.* p. 335.
- (24) *ibid.* p. 131.
- (25) *ibid.* p. 237.
- (26) *Has Veth: Het Leven van Nederlandsch-Indië*, 1900, p. 1-3.
- (27) *Brom, G.: Java in onze Kunst*, 1931, p. 35.
- (28) *Door duisteris: ibid.* p. 220.
- (29) 拙著「南の文化北の文化」昭和二十四年、九七一頁。
- (30) *Brom: ibid.* p. 46.
- (31) *De Wit, A.: Java, facts and fancies*, 1912, p. 315.
- (32) *Door duisteris: ibid.* p. 381.
- (33) *ibid.* p. 32-33.
- (34) *Schrieke, B.: Indonesian Sociological Studies*, 1935.

### 〔五〕独立への道

このような特質をもつジャワをして植民地的地位から脱却させるにはどうしたらよいか。カルティニは女性であったから、

その手段もまず最も実現可能な、いかえれば穩健な方法をとったのは当然であつた。まず自己の国土と民族の特質を十分に相手に認識させ、その美点と同時に不当な取扱いを訴へ、ヒューマニズムの点からオランダ人の取扱いの正当化を求めたのである。彼女がオランダ人によるジャワの正しい認識を要求してやまなかつたことは次の手記からもよくうかがわれる。

「ジャワとその民族についての一般的認識は次第にオランダ人の間に広まりつつある。人々がもしジャワ人について純粋な立場から知ることができたら偏見はなくなり、一般のオランダ人もジャワ人を同一の人間として見ようとするばかりでなく、単に皮膚の色が褐色であるとの理由からこれを輕蔑することなどはなくなるであらう。こうした知識をオランダ人に与える本はもっと出てよい。それには学校の教科書などから着手することが最もよいであらう。インドネシアの国土、民族、慣習、事情などについての真実を伝える本がほしい。しかしその本は無味乾燥なものでなく、子供たちも楽しんで読めるもの、その中ではるか海のかなたの美しい国土とやさしい褐色の民族についてしつかりした認識をえられるものでなければならぬ。いや、それだけでは不十分である。学校の教師自身も——とインドネシアの明確な知識をもたねばならぬ。

さらにオランダ本国などでインドネシアの国土と民族の重要性を認識させるための、具体的、直観的な企てなどはどうであらうか。ハーグかどこかで「東洋と西洋」と称するような博覧会を開いてみたらどうか。そこでジャワの美術工芸をはじめ、本

当のジャワ人を使つてのジャワの住居の百様やガマラン音楽などを実演してみせることだ。一般オランダ人がインドネシアの発展について、又何らそれについて関心をもちたないことはひとりでインドネシアにとつて悲劇であるばかりでなく、オランダにとつても恥辱なのである。政府みずから東洋の重要性についての認識にも、と積極的にならねばならぬ。

ヒューマニズムこそジャワとオランダとが互に知りあふ最良の手段なのである。特に権力をもつてジャワ人に臨むオランダ官吏の場合にそうである。ジャワ人官吏はオランダ官吏に対して尊敬をまわしているが、一体かれらが心から思うやうにしてゐるのだろうか。またオランダ官吏は高い地位にいてジャワ人官吏などに何ら尊敬の意を示さうとはしない。ジャワ人は本來心の中からあふれ出る友情に對してはとてゝ敏感なのである。ヨーロッパ人の方こそわれわれに近づくようになす第一歩をふみ出すべきだ。ジャワ人の方からは決してヨーロッパ人に近づくなどとはしないであらう。われは彼らが臆病であり、臆すしがりやであり、かつ謙虚だからなのである。

しかしカルティニの心の奥底にはオランダの繁榮も文化もジャワあつてこそであるとの強い意識が滲み出ている。これが手記の最後に彼女に次のような強い言葉を吐かせるのである。

「海のかなたにこの美しい富める国土をもつが故に、『オランダ』が植民帝國として成立しうるのだと思えるがよい。オランダ人は、『一体インドネシアなくしてオランダがあり得るか』という事を考へたらよい」<sup>(2)</sup>。

スフリーケは、植民地におけるヨーロッパ人社会と同化するための平等な教育への要求(社会ナショナリズム)と自己の評価の上昇による文化的対等性の要求(文藝的ナショナリズム)とを区分しているが、カルティニの場合にはまさにこのいずれにも該当するものであつた。そして要求がこの段階を中心に具体的に婦人の教育を強調して表現されたことと、カルティニが女性であつたことはオランダ人の間にも多くの同情者を生み、女子教育の方面ではその後開もなくカルティニが学校その他の設立によつて遺志が實現されるに至つたのである。しかしカルティニの究極の目的は以上の分析によつて明らかのように、さらに政治的なものへ通じていることは明らかである。自由に対する熱望はカルティニの一つの大きな標語であつた。自由、自立、独立へのあこがれは私たちが姉妹にとつては決して新しいものではない。エマモンパンシー(解放)という言葉がまだ一般に知られていない頃からもう私たちはそれを感じてゐたのです。一九〇〇・八〇。この考えは結局インドネシア民族の政治運動への発展の道を通るのは当然である。なほ強力なオランダ支配体制の下にあつて具体的にカルティニが政治的解放のあるべき形態をどう考へていたかは明瞭ではないが、民族の知的向上と社会的福祉の発展が独立への道であることは彼女は十分に知つてゐた。彼女は早くから次のように記している。

「全インドネシア世界の変化は必らずやってくる。その転換期はもうはつきりきまつてゐるたちがありません。われわれは革命の時間を今予想することはできません。それが大きな問題

なのです」(一八九九・一一・六)。

「革命」と云う言葉がここですでに明白に使用されていることとわれわれは注目したいのである。カルティニの没後四年にして、独立を目的とするインドネシア最初の政党ブディ・ウトモが結成されたのはまさしくこの思想の成果なのであり、さらにそれは一九二二年における一層強力なサリカト・イスマムの結成へと通ずるものであった。「われわれは前進しつづけます。かれらは時の流れを止めることはできないのです」(一九〇〇年)——カルティニのこの言葉はその後の苦難にみちんだインドネシア独立運動の過程を通じてますますその通りであったのである。

註(1) Door duisteris: ibid. p. 399-401.

(2) ibid. p. 403.

(3) Schrieke: ibid. p. 156.

(4) カルティニの没後一九一三年、オランダ本国のヘーグではカルティニ資金が設立された。これはジャワ原住民の娘たちのために学校を建設するを目的とするもので、「光りは暗黒をこえて」の印税もこれに加えられた。カルティニ学校はパタビヤ、スババヤ、スマラン、マディウン、チェリボン、バイテンヅルフ、スラカルタ、マランの各都市につくられ、すでに一九一六年には生徒数八百人を数えた。別に地方の小都市には家政を専門に教えるいくつかの学校もできた。これらの学校は今なおそのままに経営されている。また第二次大

戦後スマランに建設された印刷工場はカルティニ工場と名づけられた。

(5) Door duisteris: ibid. p. 70.

(6) ibid. p. 20.

(7) 「美しき努力」の意味で一九〇八年ワヒディン・フサドによって組織された。

(8) 一九一一年、スラカルタのパティック経営者サルマウダイらによって組織された。

(9) Door duisteris: ibid. p. 9.

## わすび

カルティニは実にかくの「とき思想」に生きていた。インドネシアナショナリズムの歴史をふりかえるとそこにはいくつかの流れがあるが、カルティニはまず最初に生れた「旧封建的貴族の子弟の間に醸成された反植民地主義」の代表であり、それがやがて「土着資本の華僑資本に対する反撥の中に形成された民族意識」などの他の流れを吸収しつつ、この国のナショナリズムの精神的背景となって幾度の起伏を経つつ一九四五年八月十七日のスカルノによる独立宣言へとつながっているのである。

今日のインドネシアが国家的な行事の一つとして毎年四月二十一日のカルティニ生誕日に盛大な祝典を行なうに至ったのも当然といえるであらう。同時にカルティニの心は無明の世界からひとたび教育によって開眼させられた民族精神発展の歴史においても貴重な実例であると思われる。われわれは何よりもカ

ルティニの生きていた明治二十年代から三十年代初期にかけてのジャワの状況を考える必要がある。当時まだ全くの無智と暗黒に支配されていたアジアの涯の植民地の原住民にどのような人間形成が予想されたであろうか。この意味でもカルティニの出現はまさに暗夜の中のだ一点の光明だったのである。私は最後にカルティニの次の言葉をもってこの稿を終りたい。

「ヨーロッパ文化によって私は国土と民族の美しさを見る眼

を開きました。しかし同時にその欠けているものと、ひどい傷口もみつけることができました。私はわが国土と民族とをかくも愛し、いとおしみます。ああ、私とその幸福のために何かでもすることができたなら！」(一九〇一・三・三)。

——一九四五年三月ジャカルタにて起稿、

一九六三年十月改稿——